

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 15 日現在

機関番号：84202

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520726

研究課題名（和文） 琵琶湖地域民具資料を用いた考古民俗学的方法論の開発研究と展示への試み

研究課題名（英文） Use of folk-cultural collections from the Lake Biwa area for the study of new archaeological folk-culture methodology and exhibits

研究代表者

用田 政晴（YODA MASAHARU）

滋賀県立琵琶湖博物館・上席総括学芸員

研究者番号：00359259

研究成果の概要（和文）：滋賀県立琵琶湖博物館が所蔵する琵琶湖地域民具資料約 6,500 点をもとにして、考古学の資料整理法を援用した民具の分類と実測を伴う新しい整理方法を検討し、資料目録やデータベースの作成と公開を行った。さらに、扱った民具のうち、琵琶湖地域に特徴的な 5 つのテーマについて、時間軸に沿った物質文化の系統を追究して、企画展示『民具を科学する』を開催し、関連冊子も同時に刊行するなど、地域社会における民具資料の保存と継承に貢献した。

研究成果の概要（英文）：This project was a case-study of how to introduce the methodologies of Archaeology into Folklore Studies, with the aim of classifying the regional folk culture materials from the Lake Biwa area that are stored in the Lake Biwa Museum. It culminated in a special exhibition held at the Lake Biwa Museum. “New Scientific Research on Lake Biwa Folklore Materials”, which focused on five themes specific to the region.

交付決定額

（金額単位：円）

|          | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|----------|-----------|---------|-----------|
| 平成 20 年度 | 900,000   | 270,000 | 1,170,000 |
| 平成 21 年度 | 800,000   | 240,000 | 1,040,000 |
| 平成 22 年度 | 800,000   | 240,000 | 1,040,000 |
| 平成 23 年度 | 700,000   | 210,000 | 910,000   |
| 総計       | 3,200,000 | 960,000 | 4,160,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：物質文化・民具・方法論・考古学

## 1. 研究開始当初の背景

1972 年に琵琶湖総合開発特別措置法が公布され、閣議決定された琵琶湖総合開発計画は、1996 年まで 2 度の計画延長を含めて 25 年間にわたって実施された。

この事業は、琵琶湖の水資源の利用を中心にした治水・利水対策であったが、琵琶湖そのものだけでなく、滋賀県の 93% を占める琵琶湖集水域の自然や風土、集落の景観、河川環境、港や道路の生活基盤などにおいて急

激な変化を伴うものであり、特に湖岸の集落においては生活・生業様式をも一変するものであった。

こうした中、琵琶湖総合開発によって失われつつある民俗文化財の記録保存をはかるため、滋賀県教育委員会は、琵琶湖総合開発地域民俗文化財特別調査を 1978 年から 5 年間にわたって実施した。この総合調査と併行して行われたのが滋賀県有形民俗文化財収集調査事業で、1978 年から 18 年間にわたって実施

した。

滋賀県立琵琶湖博物館では、この滋賀県教育委員会が収集した民具資料3,970件・6,514点の移管を受け、1996年の開館以来、基礎的な分類や整理作業を進めてきた。そして、その成果の一部は資料目録（『琵琶湖水系漁労習俗資料』など）やデータベースで公開し、また実際の展示資料としても活用していこうという期待が高まりつつあった。

この資料目録では、すべての資料写真を掲載し、全資料の寸法・重量および可能な限りの資料情報も掲載してきた。さらには、考古資料の実測法による詳細な実測図を小分類ごとに網羅しようとしたもので、これまでの民具資料目録にはない基礎的情報を可能なかぎり網羅しようと試みたものであった。

こうして、民具資料の整理に考古学的方法論を導入し、型式学的組列と分類による時間軸と空間軸を付与し、小テーマごとに考古学的成果をふまえて論じることが可能であるという見通しを得たところである。

一方で、いわゆる民具資料の分類や整理方法が全国的に定式化あるいは確立した状況にはなく、自治体や機関ごとに様々な試みを手探りで行う状態であった。

戦後の高度経済成長期を迎えて行われた民俗資料の全国緊急調査の実施や文化庁の手引き（文化庁編1965）を基礎にして、かつて優れた民具研究の実務書が刊行されていた（宮本編1975など）。そこでは、民具の資料化に向けて、観察・記録・実測の必要性や有効性が幅広く説かれ、今なお民具を研究する上での基本文献であり続けているが、その後の各調査機関の努力にもかかわらず、必ずしも全国的に統一的な民具の調査・記録そして報告の方法論が確立した状況にはなっていなかった。

## 2. 研究の目的

滋賀県立琵琶湖博物館が保管する6,514点の民具資料を基礎に、考古学の資料整理法を援用した新しい民具の分類・整理・保管方法を確立し、資料目録・データベースを公開する。また、その成果を利用して、物質文化に基づく生活・生業史のうち、琵琶湖地域に特徴的な農具・漁具・製茶道具・船具・桶風呂という5つのテーマに沿って新しい展示を試みるなど、伝統的な物質文化の保存と継承につながるよう地域社会における意識の高揚に寄与することを意図した。

## 3. 研究の方法

保管する全民具資料の寸法・重量および資料情報を記録し、考古資料実測方法に基づく詳細な実測図を資料の小分類ごとに作成した。この実測とそれに伴う資料の観察記録の試みにより、資料ごとの新しい分類体系を考察し

て型式分類を行い、資料群の地理的分布のみならず時間的位置も明らかにするための型式学的方法論開発の実践を行った。

こうした活動を行う中で、その方法論を普遍化するための議論と検討を行い、さらには5つの資料の種類ごと、具体的な分析を行った。

## 4. 研究成果

### (1) 資料目録・データベース

琵琶湖地域で収集した民具資料のうち「生産生業（諸職）ほか」を扱った『琵琶湖博物館資料目録』（民俗資料5）をとりまとめて刊行し、民具資料データベースもあわせて整備・公開した。

### (2) 方法論検討

資料整理作業を実践的に行う中での個別の課題を前に、考古民俗学的方法論の具体的な検討を行い、資料の種類ごとに分類・型式設定・型式組列・資料ごとの地域性などの分布、考古資料の類例の検討を行い、これらの理論化をすすめた。これらの概要については、日本民具学会公開シンポジウム「民具の保存」で講演を行い、その成果をさらに総括的にとりまとめて「民具資料の整理－考古民俗学的方法論の試み－」と題して『民具研究』に投稿・掲載された。

これまでの国内における民俗学研究は、「信仰」重視、「無形」優先の傾向がある中、これまでの各地での民具資料の収集事業を概観すると、当初の収集時における聞き取り情報を重視するあまり、その後、物的資料としての資料そのものに向き合う機会が少なかった。さらには型式概念軽視の傾向が強く、少なくとも資料の分類作業を行い、機能による種類・形式概念、物的特徴の共通性によって時間軸に沿った分類である型式の認識というものは希薄であった。

このように1975年段階で提起された考古資料記録法の援用とその研究法は、民具調査・研究の実務の場で広まることなく、また出土した考古資料などの機能・用途検討にあたっては、民具研究の成果を引用や参考にすることなく、それぞれが独自の道を歩んできた。

琵琶湖博物館収蔵民具資料の整理にあたっては、漁労習俗用具については大・中・小分類および大・小項目による5次元での分類、それ以外の資料は大・中・小分類の下の大項目による4次元での分類を行った。

例えば、ウケの場合、（大分類）生産生業－（中分類）漁労－（小分類）漁具および漁労関係用具－（大項目）陥穽漁具－（小項目）ウエあるいはタツベとなり、これでもウエを細分するものではないため形式あるいは型式に分類できない。これらは、基礎的整理としては

なはだ不十分ではあるが、その後の作業を容易にするものではあり、その結果、資料の「地域性」と「時代性」が読み取れてくる。つまり、資料収集時の聞き取り調査による「用途」「機能」に加え、資料自身の情報としての「形式」分類が加わり、それらが「地域性」と「時代性」を明らかにしていくのである。

資料の詳細な実測は、単に図化ではなく、資料の「観察」「実測」「記述」を伴う資料の客観化である。資料と向き合い、観察することによって見えてくる情報は多く、これらは図化すると共に「注記」とよぶ図面への記述作業を行う。必要に応じて部分的な拡大実測図や展開図、復元も含めた図化や拓本を記録としてとることも必要となる。

当然のようにすべての資料の統一的な写真撮影も必要であり、それだけを集中的に行っても3年を要した。また、琵琶湖博物館のように収集から整理までの間に30年近く経っている場合は、資料の形状、特に乾燥・収縮による寸法や重量が変化している場合がある。このため、すべての資料について、これも統一的に法量と重量を再計測した。なお、こうした資料目録・データベース記載事項は、その資料写真ともども資料札としてカード化し、パウチ加工した後、木綿糸にて資料に付した。個別の資料写真や法量等も記載しておくことによって、札が万一資料と離れても照合が容易になる。

このように観察・実測・記述を伴う資料の客観化は、相当な手間と時間がかかるものであるが、一旦、現地から収集された動産的資料である限り、また、しかるべき資料の保存環境にある限りにおいては、拙速な取り扱いは避けるべきである。いわば緊急避難的な段階は経た後であるため、次の世代にまで整理作業が引き継がれることも念頭においたような立場での処理・対応が望まれる。

### (3) 個別民具資料分析

鋤・鍬・犁・唐箕・万石通などの農具、手回し蒸し器・焙炉などの製茶道具、小糸網・釜などの漁具、舵・櫓・碇・垢取りなどの船具、それに桶風呂を取り上げて個別に詳細な実測と観察記録をとりまとめて、その地域性や時代性を明らかにした。

鋤・鍬・犁については、湖北地方は鋤や多彩な鍬を使用し、湖南では犁を主に使用しながら鋤・鍬は補充で使用すること、湖東でも湖岸部では犁を使用せず、鋤・鍬を使い、扇状地では犁とその補充に鋤を使うことを明らかにした。こうした違いは、滋賀県が琵琶湖を中心にして平野から山までの多様な地理的条件を有していることによると結論づけた。

唐箕・万石通は型式の多様性が際立ち、新旧形式が同時に製作・販売されるなど併存していたことがわかった。千石通とおしつき

唐箕はそれぞれ江戸系と京都系といった製作技術を背景に、千石通は湖北、とおしつき唐箕は湖南から湖東地域というように、滋賀県を南北に二分する形で使われていた可能性が判明した。

製茶道具は、手回し蒸し器における丸田式の導入にみるように、生産地間の広い横のつながりの中で生産効率を上げる努力が認められたが、一方で農家の副業や自家用茶の生産にあたっては焙炉などの伝統的道具も使用し、品質を保っていたことが判明した。

琵琶湖の漁具のうち、小糸網は明治以降、多くの改良が加えられ、多種多量の魚を捕獲するために専門の業者による工夫がなされたことを詳述し、釜については単体で使用するものの多様性と延縄で使用するものの規格性も明らかにした。

琵琶湖の船や船道具は、その規模によって2つに類型化され、総じて外洋のそれより小型であることは、内水面での船と船道具の特質であると論じたところである。

また、滋賀県の湖北や湖東に特徴的な桶風呂には、いくつかの形式が知られるが、琵琶湖の対岸の湖西には全く知られていないことも確認した。

### (4) 成果の公表

こうした研究成果は、琵琶湖博物館ギャラリー展示『民具を科学する－明治の絵図と現代の実測図から見た近江の民具－』と題した展示を2012年1月から3月まで開催し、あわせて『民具を科学する』というこれまでの研究成果をまとめた参考資料を刊行した。

これらの展示及び関連印刷物は、これまでの民具学会では見られなかった実証的で詳細な観察に基づくものとしてものとして研究者の間で知られるようになったため、配布途中で増刷し、研究成果をさらに広く公表していくこととなった。

また、分担研究者辻川智代による「農具から近江の地域性をさぐる」と題した研究発表を『新琵琶湖学セミナー』として2012年3月3日に滋賀県立琵琶湖博物館で行うなど、折に触れて研究者や一般住民を対象とした成果公表をフロアトーク・セミナーなどの機会を利用して行ってきた。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

①用田政晴、民具資料の整理－考古民俗学的方法論の試み－、民具研究、査読有、145号、2012、51－60。

②辻川智代、民具を科学する－農具から見た滋賀県の地域性－、琵琶博だより、査読無、第6

号、2012、1。

③用田政晴、太湖の家船と琵琶湖の「家船」、淡海文化財論叢、査読無、第3輯、2011、254-259。

④辻川智代、滋賀県の風呂釜、淡海文化財論叢、査読無、第3輯、2011、248-253。

⑤楊平、用田政晴、名水百選認定と農村水環境の歴史的保全、生活文化史、査読有、第58号、2010、3-10。

⑥菊池健策、日高真吾、用田政晴、伊達仁美、第34回日本民具学会公開シンポジウム「民具の保存」、民具研究、査読無、142号、2010、1-22。

⑦楊平、用田政晴、水環境の歴史的保全を社会学から考える-泉神社湧水-、佐加太、査読無、第32号、2010、2-3。

⑧用田政晴、書籍紹介『琵琶湖博物館資料目録 民俗資料3・4 衣食住・生産生業』、民具マンスリー、査読無、第41巻7号、2008、21-22。

〔学会発表〕(計3件)

①辻川智代、農具から近江の地域性をさぐる、新琵琶湖学セミナー、2012年3月3日、滋賀県立琵琶湖博物館

②用田政晴、琵琶湖博物館における技術と民具の保存・継承、第34回日本民具学会公開シンポジウム、2009年12月5日、京都造形芸術大学。

③老文子、桶風呂の形態と使用域、琵琶湖博物館研究セミナー、2008年5月16日、滋賀県立琵琶湖博物館。

〔図書〕(計4件)

①辻川智代、用田政晴、老文子、國分政子、細川真理子、民具を科学する-明治の絵図と現代の実測図から見た近江の民具-、滋賀県立琵琶湖博物館、2012、25。

②老文子、湖国の桶風呂、生命の湖 琵琶湖をさぐる、文一総合出版、2010、200-201。

③用田政晴、湖と山をめぐる考古学、サンライズ出版、2009、448。

④老文子、愛東の桶風呂、東近江市史、愛東の歴史、東近江市史編纂室、2009、499-499。

⑤用田政晴、辻川智代、細川真理子、國分政子、老文子、『琵琶湖博物館資料目録』第19号(民俗資料5)生産生業(諸職)ほか、滋賀県立琵琶湖博物館、2009、400。

〔その他〕

ホームページ等

琵琶湖博物館民俗資料データベース

<http://www.lbm.go.jp/emuseum/database/minzoku/index.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

用田 政晴 (YODA MASAHARU)

滋賀県立琵琶湖博物館・上席総括学芸員

研究者番号：00359259

### (2) 研究分担者

老 文子 (OI FUMIKO)

滋賀県立琵琶湖博物館・研究部・学芸員

研究者番号：60470184

辻川 智代 (TSUJIKAWA TOMOYO)

滋賀県立琵琶湖博物館・特別研究員

研究者番号：70443463